

始祖神話についての考察 コロンビアの神話と記紀神話

富士原伸弘*

Consideration of fable of root -The colombian myth and the japanese myth -

Nobuhiro FUJIHARA

Synopsis

In Japan it is not known well, the Colombian myth is introduced. That is the myth that “Teikuna spreads to the world”(Los Ticunas pueblan la tierra). This myth is known in Colombia well. By comparison with the Japanese myth while, it examines concerning the contents of that myth.

始めに

コロンビア共和国は中央アメリカと南アメリカとが接する、南米大陸北部に位置する国である。アンデス山脈とアマゾン川という多様な自然環境の中にあり、その国土面積は日本の3倍ほどにもなる。

古代中南米には北にマヤ・アステカ文明、南にインカ文明が栄えていたことで有名であるが、コロンビアはちょうどその中程に位置しており、それらとは別に独自の文化を持っていたようである。1万4千年ほど前と思われる人類居住の痕跡が見つかっており、その後コロンビアの地にはチブチャ(ムイスカ)・タイロナなどの文化が興っている。

コロンビアは「エル・ドラド」伝説発祥の地であり、「サン・アグスティン」の遺跡や「黄金のスペースシャトル」とよばれる発掘品なども存在する、古代ロマンをかき立てられる国である。その意味で大変興味深い文化を持つ国であるといえるのだが、本論文を書くきっかけとなったのは本校在学中のコロンビア人留学生アンデルソン君を担当したことに始まる。

本校3年次のカリキュラムにある、留学生を対象とする「日本語」の授業の中で日本の神話について説明をした時のことである。ブラジル・ペルー・メキシコなどの神話(いわゆるマヤ・アステカ・インカの神話)は手元にある文献などによっ

て容易に見つけられるのに対して、コロンビアの神話については管見の範囲で全く入手できなかった。そこでアンデルソン君にコロンビアの神話について調べてきてもらったところ、以下に紹介する「ティクナは地球に広がる(Los Ticunas pueblan la tierra)」という日本ではあまり知られていない神話を教えてくれたのである。

「ティクナ」とは南アメリカの先住民の部族名である。コロンビアの人々にとってティクナ族は必ずしも始祖というべき存在ではないらしい。ティクナ族はコロンビア以外の土地にも住んでいるのではないかと思われるし、コロンビア人が全員ティクナ族の末裔であるという訳ではないのだ。しかしアンデルソン君によれば、この神話はコロンビアに住んでいた大昔の人たちの物語という認識で人々に受け入れられているようで、コロンビアの小学校の教科書に載っていたそうである。

原文はコロンビアの主たる言語であるスペイン語で書かれている。原文といっても本来この神話は口承で語り伝えられていたものであるらしい。故に出典となる文献は存在しない。アンデルソン君はインターネットのホームページでこの神話を見つけてきてくれたのだが、そのホームページにもそうした事情が説明されている。⁽¹⁾

残念ながら筆者はスペイン語が全く話せないの
で独自の翻訳を行うことはできない。またアンデルソン君も日本語を勉強中であるため、正確な翻訳はまだ難しい。そこでアンデルソン君に大まかな日本語訳をしてもらい、筆者ができるだけ正確

* 一般教科

な表現となるように校正をするという共同作業によってなんとか翻訳を完成させた。

翻訳の間違いなどまだあるかもしれないし、筆者の南米神話に対する知識の無さゆえに専門家の方から見れば稚拙な内容となっていることもあるかもしれないがご容赦願いたい。ご指摘・ご批判などあれば、ご教授下されば幸いである。

以下、原文の区切り（.または:）ごとに全体を38の文に分けて、日本語訳・スペイン語原文・解説の順番で紹介をしていく。

ティクナは地球に広がる (Los Ticunas pueblan la tierra)

1) ユーチェは昔から、世界に1人で住んでいた。

Yuche vivía desde siempre, solo en el mundo.

「ユーチェ」というのが神の名前であるらしい。実のところ神と断定して良いかどうかははっきりとしない。ユーチェが天地を創り出した創造神と書かれているわけではないし、生物を生み出したとも書かれていない。ユーチェ以外の生物が2)以降に登場するにもかかわらず「1人」で住んでいたとはどういうことなのだろうか。ユーチェが人間と同じ姿であろうことは10)16)などに、「顔」や「ひざ」という身体部分の描写があることから類推できる。世界(地球)は既に存在し動物たちもいるようであるが、神および神と同じ姿である人間はユーチェ以外にはいないという意味だろうか。

2) ヤマウズラとパオヒル(鳥)と猿とグリジョス(バッタ)と一緒に地球で長い間暮らしていた。

En compañía de las perdices, los paujiles, los monos y los grillos había visto envejecer la tierra.

ユーチェは種々の動物たちと暮らしていたことになる。ジャングルに住む動物たちの中から、これらの鳥・猿・虫という選択をしていることには意味があると思われるが現時点では不明である。⁽²⁾ また「長い間」がどれぐらいの期間を意味しているのかわからないが、「地球が古くなる・年を取る」という意味にもなるようなので、ある程度長

い時間の経過を考えて良いようだ。

3) その動物たちのおかげで世界には生命が満ちあふれていて、生命は時間が限られ、時間がたてば死んでしまうことに気が付いた。

A través de ellos se daba cuenta que el mundo vivía y que la vida era tiempo y el tiempo... muerte.

ジャングルの動物たちの生と死の様子を目撃することによって、ユーチェは生命のサイクルを知るのである。ここから判断すればユーチェは動物たちの創造主では無いと考えて良い。創造主であればこのサイクルを当然知っているはずだからである。また生と死のサイクルを初めて知ったとあるもののユーチェは不死なる存在ではない。年を取り老化もすることが10)11)に描写されている。

4) ユーチェが住んでいたところより美しい場所にはなかった。ジャングルの中にある小さな川のそばで、小さな家に住んでいた。

No existía en la tierra sitio más bello que aquél donde Yuche vivía:

ユーチェが住んでいた場所はティクナ族にとってのユートピアである。次の5)に書かれているように、暑さと大雨による洪水といったジャングル生活における自然の驚異から守られた聖域である。

5) そこは暖かくて暑過ぎなく、大雨の降らない静かな場所だった。

era una pequeña choza en un claro de la selva y muy cerca de un arroyo enmarcado en playas de arena fina.

6) その場所を見たことのある人はいない。

Todo era tibio allí; ni el calor ni la lluvia entorpecían la placidez de aquel lugar.

7) ティクナ族は今でもその場所へ行ってみたいと思っている。

Dicen que nadie ha visto el sitio, pero todos los Ticunas esperan ir allí algún día.

六朝時代東晋の詩人陶淵明が書いた「桃花源記」

に見える道家的ユートピアの桃源郷が思い出される。桃の花が咲き乱れる平和な農村世界であった桃源郷は、意識的には辿り着くことのできない隠れ里である。桃源郷とユーチェの住む世界との違いは、ユーチェの世界が単なる理想郷ではなく、ティクナ族の始源の地（民族誕生の地）となっていることである。

8) ユーチェは川へ水浴びに行った。

Una vez Yuche fue a bañarse al arroyo, como de costumbre.

9) 川岸から水に入って、ほとんど全身水の中に入った。

Llegó a la orilla y se fue introduciendo en el agua hasta que estuvo casi enteramente sumergido.

この後 27) でユーチェはティクナ族最初の男女一対の人間を生み出すことになる。記紀神話において水を浴びて神（人）を生み出すといえ⁽³⁾伊耶那岐命による三貴子誕生の場面であろう。

竺紫の日向の橘の小門のあはき原に到り坐して、襖被しき。

黄泉国から戻ってきた伊耶那岐命は黄泉の穢れを祓うために九州は日向の「橘小門之阿波岐原」で水浴び（襖ぎ）をするのである。その際多くの神が誕生するのであるが、最後に伊耶那岐命が顔を洗うことによって三貴子が誕生する。

是に、左の御目を洗ひし時に、成れる神の名は、天照大御神。次に、右の御目を洗ひし時に、成れる神の名は、月讀命。次に、御鼻を洗ひし時に、成れる神の名は、建速須佐之男命。

また水の中に入るのではないが、天照大御神と須佐之男命が「うけい」をする場面で天の安の河を挟んで行う場面も挙げられよう。天照大御神は「天之真名井」の水を須佐之男命の剣にふりすすいでから三柱の女神を、須佐之男命は天照大御神の珠に水をふりすすいでから五柱の男神を各々生み出すのである。ここにも水の霊力と誕生の関連性が見られてる。水の中に生命の神秘を見出していく文脈は世界中の文化に共通の意識であるのだろう。

10) 顔を洗おうとした時、水に映った自分の顔を見て初めて自分が年を取ったことに気が付い

た。

Al lavarse la cara se inclinó hacia adelante mirándose en el espejo del agua y por primera vez notó que había envejecido.

11) 自分が年を取ったことで悲しくなった。

El verse viejo le entristeció profundamente.

前述したように、ユーチェは不死の存在ではない。自分自身が年を取ることを知らなかったという様子からは、無知の状態にある原初の人（または神）と考えればよいのだろうか。そこには無知の状態であった最初の人間が知恵の実を口にするとたん楽園を追放されるという、聖書におけるアダムとイブの姿を連想させるものがある。

また記紀神話における伊耶那岐命の黄泉国訪問譚においても、伊耶那美命の変わり果てた本来の姿を見て、知ってしまったがゆえに伊耶那美命と決別し人間界に生と死のサイクルが生まれることになる。

爾くして、伊耶那美命の答へて白さく、「悔しきかも、速く来ねば、吾は黄泉戸喫を為つ。然れども、愛しき我がなせの命の入り来坐せる事、恐きが故に、還らむと欲ふ。且く黄泉神と相論はむ。我を視ること莫れ。」如此白して、其の殿の内に還り入る間、甚久しくして、待つこと難し。故、左の御みおづらに刺せる湯津々間櫛の男柱を一箇取り闕きて、一つ火を燭して入り見し時に、うじたかれころきて、頭には大雷居り、胸には火雷居り、腹には黒雷居り、陰には析雷居り、左の手には若雷居り、右の手には土雷居り、左の足には鳴雷居り、右の足には伏雷居り、并せて八くさの雷の神、成り居りき。是に、伊耶那岐命、見畏みて逃げ還る時に、其の妹伊耶那美命の言はく、「吾に辱を見しめつ。」といひて、即ち予母都志許売を遣して、追はしめき。

そこには「知る」ことの悲劇というべき法則が存在しているかのようなのである

12) 「残念だ。年を取ってただ 1 人。

-Estoy ya viejo... y solo.

13) 私が死んだら地球はもっと寂しくなるだろう」

¡Oh! se muero, la tierra quedará más sola todavía.

14) がっかりして、ゆっくりと家に帰った。

Apesadumbrado, despaciosamente emprendió el regreso a su choza.

地球 (tierra) という単語が 2) にも使われているが、ユーチェが自分のいる世界をどのようなものであると考えているのか、興味深いところである。地球という言葉には、1つの森というべき限られた空間を超えて大きな世界観が存在するかのようである。もっともこの原文は口承が基であるので、細かい言葉遣いなどテキストとしてあまり信用し過ぎるのは危険であろう。表現に注目することは必要であるが、どこまでテキストに拘るのが問われるところである。

15) ジャングルの動物たちの鳴き声や鳥の鳴き声を聞いて憂鬱になった。

El susurro de la selva y el canto de las aves lo embargaban ahora de infinita melancolía.

ジャングルでは動物たちの立てる物音や鳴き声などが頻繁に聞こえてくることだろう。ユーチェは森に満ちあふれた生命の連鎖の中で、自己の孤独を痛感したのであろうか。

16) その途中でひざに虫に刺されたような痛みを感じ、何があったかよくわからなかったが、蜂に刺されたと思った。

Yendo en el camino sintió un dolor en la rodilla, como si lo hubiera picado algún insecto; no pudo darse cuenta, pero pensó que había posido ser una avispa.

ここで蜂 (avispa) に刺されたとあるが、本当に蜂だったのかどうかは不明である。しかし蜂とわざわざ表現するのだから蜂に何らかの意味があるのではないかと思われる。この後の展開を見ればこのひざに感じた痛みが全ての原因であると考えられるので、特殊な霊的現象であると判断すべきか。

17) その後眠たくなってきた。

Comenzó a sentir que un pesado sospor lo invadía.

18) 「体が何かおかしい」

-Es raro cómo me siento.

19) 戻って寝ようと思った。

Me acostaré tan pronto llegue.

20) 歩き続けて家に着いてからベッドですぐに寝てしまった。

Siguió caminando con dificultad y al llegar a su choza se recostó, quedando dormido.

21) 長い間寝ていた。

Tuvo un largo sueño.

22) 夢で自分が年寄りになって弱くなり、自分の体から他の人間が出てくるのを見た。

Soñó que mientras más soñaba, más envejecía y más débil se ponía y que de su cuerpo agónico salían otros seres.

23) 翌日目が覚めた。

Despertó muy tarde, al otro día.

物語の展開にとって夢が重要な鍵となるような説話は、古事記にも見出せる。

故、天つ神御子、其の横刀を獲し所由を問ひしに、高倉下が答へて曰ひしく「己が夢みつらく、『天照大神・高木神の二柱神の命以て、建御雷神を召して詔はく...中略...爾くして、答へて白さく、「僕八降らずとも、専ら其の国を平らげし横刀有り。是の刀を降すべし。此の刀を降さむ状は、高倉下が倉の頂を穿ちて、其より墮し入れむ」とまをす。「故、あさめよく、汝、取り持ちて天つ神御子に献れ」といふ。』といめみつ。故、夢の教の如く、旦に己が倉を見れば、信に横刀有り。故、是の横刀を以て献りつらくのみ」といひき。

熊野の神に苦戦する神武天皇を救った高倉下は夢に現れた天照大御神・高木神のお告げを受けたのであり、

爾くして、天皇の愁へ歎きて神牀に坐しし夜に、大物主大神、御夢に顕れて曰ひしく、「是は我が御心ぞ。故、意富多々泥古を以て、我が前を祭らしめば、神の氣、起こらず、国も、安らけく平らけくあらむ。」といひき。

崇神天皇は大物主大神の声を聞き意富多々泥古を探しだし、

故、天皇、其の謀を知らずして、其の後の御

膝を枕きて、御寝為坐しき。爾くして、其の後、紐小刀を以て其の天皇の御頸を刺さむと為て、三度挙りて、哀しき情に忍へず、頸を刺すこと能はずして、泣く涙、御面に落ち溢れき。乃ち天皇、驚き起きて、其の后を問ひて曰ひしく、「吾、異しき夢を見つ。沙本の方より暴雨零り来て、急に吾が面を濡らしき。又、錦の色の小さき蛇、我が頸に纏繞りき。此如夢みつるは、是何の表にか有らむ。」といひき。

垂仁天皇は天皇殺害を試みる沙本毘売を夢で知覚している。また垂仁天皇は物言わぬ本牟智和氣の御子について

是に、天皇、患へ賜ひて、御寝しませる時に、御夢に覚して曰はく、「我が宮を修理ひて、天皇の御舎の如くせば、御子、必ず真事とはむ。」と、...

のように出雲大神からのお告げも受けている。

ただし垂仁天皇の沙本毘売が殺害を試みる 1 例を除き全て神のお告げ(夢による神託)であって、ユーチェが見た夢のような予知夢と同じ性質のものとはいえない。古事記において夢を見るのは天皇だけであり、そこに夢によって様々な問題を解決する糸口をつかむ特殊な能力を見て取ることができる。ユーチェにも何か神秘的な能力が備わっているということの現れであろう。

24) 立ち上がろうと思ったが、痛みのためにできなかった。

Quiso levantarse, pero el dolor se lo impidió.

25) その時ひざがはれてこぶになっていることに気づいた。

Entonces se miró la inflamada rodilla y notó que la piel se había vuelto transparente.

26) ひざの中で何かが動いていた。

Le pareció que algo en su interior se movía.

27) よく見てみると、二人の小さな人間が動いていた。

Al acercar más los ojos vio con sorpresa que, allá en el fondo, dos minúsculos seres trabajaban; se puso a observarlos.

35) において述べるが、ひざの中には「小さ

な」人間がいたのである。

28) その姿は男性と女性だった。

Las figurillas eran un hombre y una mujer:

29) 男性は弓を作り、女性はチンチョロ(かばん)を作っていた。

el hombre templaba un arco y la mujer tejía un chinchorro.

男性と女性に性差による分業がみられる。男性は狩りのための弓を作り、女性を作るチンチョロとはかばんのようなものであるらしい。ただこぶの中にいるのではなく、仕事をしているというのは興味深い記述である。ティクナ族の生活習慣が反映されていると思われる。

またここにはジェンダーの意識が見られるだけではない。見逃してはならないのが、この男女が成人であるということだ。幼児の状態から成長をしたのではなく、成人としてひざのこぶの中でティクナ族の生活を営んでいるのだ。ここには単なる異常出生譚とは違う要素も含まれていると考えられる。

30) びっくりして、ユーチェは聞いた。

Intrigado, Yuche les preguntó:

31) 「君たちは誰だ？」

-¿Quiénes son ustedes?

32) どうやって中に入ったのか？」

¿Cómo llegaron ahí?

33) 二人はユーチェを見たけれど、返事をしないで仕事を続けた。

Los seres levantaron la cabeza, lo miraron, pero no respondieron y siguieron trabajando.

ユーチェに返事をしないのはなぜであろうか。気付かなかったからではない。ユーチェを見ているのだ。そもそもユーチェと彼らとの関係はどのようなものなのであろうか。神と人なのか、巨人と小人なのだろうか。それとも同じ人間同士なのだろうか。両者の優劣関係はユーチェが主で、こぶの中に寄生しているとも考えられる男女が従であると判断するのが普通であろう。ユーチェが無

視されてしまうのは、ユーチェよりもこぶの中の男女の方が中心であるからとしか考えられない。ティクナ族にとって重要な始祖たる存在とはユーチェではなく、この男女ということなのだろうか。

34) 返事をもらえなかったユーチェは、立ち上がるとうとしたが倒れてしまった。

Al no obtener respuesta, hizo un máximo esfuerzo para ponerse de pie, pero cayó sobre la tierra.

35) その時ひざのこぶがやぶれ、二人は外に転がり出るとすぐに体が大きくなっていき、それと同時にユーチェの体は弱って死にかけた。

Al golpearse, la rodilla se reventó y de ella salieron los pequeños seres que empezaron a crecer rápidamente, mientras él moría.

巨人の中から普通のサイズの間人が出てきたのではない。ひざの中の間人は27)に記述されているように小さな間人であり、外に出た二人の体は次第に大きくなるとある。ここで誕生した最初の間人たちも現在の間人よりも遥に大きな体格をしていたのなら話は別であるが、ティクナ族の最初の間人と表現されている彼らにそのような特徴があると考えるのは難しい。このことからユーチェは現在の間人と変わらぬ大きさであると考えて良い。

この男女はひざのこぶから誕生している。優秀な能力を持つ者が母親のお腹からではなく、人間の身体各部から生まれ出る類の異常出生譚としては、ギリシア神話に頭痛を起こしたゼウスの頭を割って生まれ出るアテナ女神誕生の物語がある。しかもアテナは成人で武具を纏って出現するのである。日本の記紀神話には例がないが、敢えていえば伊耶那美命の死の原因として伊耶那岐命に斬り殺された迦具土神の体から神が生まれたとする物語が同じ発想であるといえよう。

殺さえし迦具土神の頭に成れる神の名は、正鹿山津見神。次に、胸に成れる神の名は、淤藤山津見神。次に、腹に成れる神の名は、奥山津見神。次に、陰に成れる神の名は、闇山津見神。次に、左の手に成れる神の名は、志芸山津見神。次に、右の手に成れる神の名は、羽山津見神。次に、左の足に成れる神の名は、原山津見神。次に、右の足に成れる神の名は、戸山津見神。

中国では釈迦が母親の右脇腹から、老子は左脇腹から誕生したという伝説があるようだ。老子の伝説は道教に取り込まれる中で潤色されている可能性が高いと思われるが、老子も生まれ出た時には成人(正確に言えば老子の場合は老人)であったとされる。

迦具土神とその体から生まれた神たちとの優劣関係は明確ではないが、アテナや釈迦、老子などは異常出生による神性が付加されているといえよう。とすれば、ユーチェのひざのこぶから生まれ出たこの男女にもそのような性質を認めるべきだろうか。ティクナ族の始祖伝承として捉えるならば、そのような神性付加がなされていてもおかしくはない。

36) 二人の成長が止まると、ユーチェは死んでしまった。

Cuando terminaron de crecer, Yuche murió.

原初の神の死によって世界が創出される神話としては、中国の盤古神話が挙げられよう。盤古は天地が混沌とする中に誕生した巨人であり、その死体から日月・山河など万物が生まれたとされている。ユーチェと盤古には始祖として共通するイメージがあるように感じられるが、その本質は大きく異なっているようである。

第1にユーチェは盤古のごとき万物の始祖ではないということだ。宇宙と共に存在し、天地創造に関わり、万物の祖となる盤古とは次元が異なるのである。

第2にユーチェの死はただの死であってそこから何も生み出されないことが挙げられる。ユーチェの死とひざのこぶの中にいた男女の成長とはシンクロしているので両者が無関係ではあり得ないが、ユーチェが死ななければならぬ理由が不明確である。世代交代の表現であろうか。またユーチェは巨人とは考えられないので盤古のような万物創造の礎となるにはスケールが小さすぎるだろう。

37) その二人はティクナ族の最初の間人となり、その後その場所で大勢の子供を産んだけれども外の世界へ行きたくなくて、ティクナ族は世界に広がったのである。

Los primeros Ticunas se quedaron por algún tiempo allí, donde tuvieron varios hijos; pero más tarde se

marcharon porque querían conocer más tierras y se perdieron.

38) 大勢のティクナ族がその場所を探しているけれど、今まで見つかっていない。

Muchos Ticunas han buscado aquel lugar, pero ninguno lo ha encontrado.

ティクナ族の最初の人間となるこの二人には神としての性質は希薄である。特定の名前もない。異常出生という点を除けば普通の人間として表現されていると考えて良い。

この男女一対の最初の人間は聖書における最初の人間であるアダムとイブを彷彿とさせる。しかし彼らはアダムとイブのように楽園を追放されたのではなく、自ら聖域を離れたのである。ティクナ族にとっての聖域とは何だったのだろうか。ユーチェの暮らした世界は「暖かくて暑過ぎなく、大雨の降らない静かな場所」と表現されている。最初のティクナ族はなぜこの地を離れたのだろうか。しかし、もしも彼らがユーチェの世界を離れなければ、ティクナ族は民族として停滞し閉塞感の中で滅びの運命を辿ったかもしれない。成長した子供が親の庇護の下から巣立っていくように、ユーチェの世界を離れたからこそ、ティクナ族は世界に広がることができたのだ。

まとめと展望

この神話はコロンビアの神話であるが、あくまでティクナ族の始祖神話である。コロンビアと日本とでは国の成り立ちや民族など様々な違いがあり、国家が作り上げた記紀神話という体系的な神話とこの神話を同列に扱うことはできないが大変興味深い内容を持っている。

ユーチェの存在は謎である。彼は始祖なのだろうか。ここでいう始祖の概念は、

血縁的紐帯によって結ばれる共同体の起源と考えられた存在

であり、

その始祖と現在の共同体との関係を説明することが始祖神話(始祖伝承・説話)であると考えている。⁽⁴⁾

始祖を神とする村立ての神話が始祖神話である

ならば、民族(共同体の全構成員)は神との血縁関係が結ばれていなければならない。そうでなければ神を祀ることによる村の平和が保証されなくなってしまうだろう。

ユーチェを神として考えた場合、その性格が弱いものであることは先述した通りである。ユーチェには突出した霊能が与えられてはいないし、世界や万物の創造主として描かれてはいないのである。

一方、ユーチェのひざのこぶから生まれ出た男女一対の人間、ティクナ族の最初の人間と表現されている彼らが始祖であるのか。彼らも神としての属性が明確になっているとは言い難い。始祖が神でなければならないということはないが、このティクナ族最初の人間は全く普通の人間であるとも考えられない。異常出生譚という特殊性があるからだ。

ユーチェがひざのこぶにいる彼らに無視されたり、ユーチェの死とともに成長する様子から、この神話を語り継いでいたティクナ族の人々にとって重要であるのはひざのこぶの中の男女「最初の人間」であるのだろう。始祖としての意識はユーチェのひざのこぶから生まれた一対の男女に向けられていると考えられる。

それではユーチェとは何者なのだろうか。問題は振り出しに戻ってしまう。森の住人としてティクナ族を世界に生み出した神的存在とでも考えれば良いのだろうか。

更に突き詰めてみると、ティクナ族にとっての神とはどのようなものであるのかという疑問が浮かんでくる。ギリシア・中国・日本・聖書などに見られる神話世界における神の存在とは別の次元にいるのではないかとも思えてくる。

コロンビアの神話はまだ日本に十分に知られていないとはいえない。コロンビアに限らず世界にはまだまだ多くの知られざる神話が存在することだろう。比較神話学が専門ではないのでそれら全てを明らかにすることは到底かなわないだろうが、機会があればまた継続して調査・研究を行ってきたい。

注

(1)「Cuentos y leyendas americanas」<http://www>.

geocities.com/Athens/Forum/6413/leyendas/
leyendas.html

より引用した。

- (2) 原文「paujiles」を「パオヒル(鳥)」としたが、日本でどの鳥に相当するのかが不明である。ご存じの方はご教授願えれば幸いである。
- (3) 古事記の引用は、新編日本古典文学全集1『古事記』(山口佳紀・神野志隆光校注・訳、小学館、平成9年6月)を用い、必要に応じて表記等を適宜改めた。
- (4) 『上代説話事典』より引用した。(大久間喜一郎・乾克己編、雄山閣、平成5年5月5日)